

【原著論文】

モンゴル語の二重格語尾の日本語訳における熟達度による違い

ゴ スチンゴワ *

摘要

日本語において格助詞を重ねて使うことはできないが、モンゴル語では格語尾と格語尾が重ねて使われる場合がある。その重ねて使われる格語尾を二重格語尾という。また、モンゴル語の二重格語尾は大きく三分類できる。そのため、本稿ではゴ(2020)の分類結果を踏まえて、モンゴル語の二重格語尾が含まれる文を、モンゴル語を母語とする日本語学習者がどのように翻訳しているのか、日本語の学習レベルが上がることによってどのような特徴がみられるのかについて日本語能力試験2級(JLPT N2)と3級(JLPT N3)レベルの学習者それぞれ20名を調査対象としてアンケート調査を行い、その結果を分類した上で比較分析することを試みた。

1. はじめに

留学生が日本語を習得する際、格助詞を始めとした文法項目を系統的に学習する必要がある。日本語とモンゴル語のいずれの言語も形態論上は膠着語に分類され、格語尾を付着させることで文の文法的意味を示す。一般的にモンゴル語母語話者が日本語を学ぶ場合、モンゴル語との異同を確認する作業からはじまり、日本語の基本文法を一層容易かつ正確に理解したうえで使えるようになることを考える。例えば、日本語の格助詞「から」「より」がモンゴル語の奪格語尾の「*нээ*」と対応するように、日本語とモンゴル語を比較して学ぶだけでも、日本語の格助詞に関する用法を理解することが可能である。しかし、小林(1983)はモンゴル語を母語とする日本語学習者は日本語の格助詞を間違いやすいと述べている。このように格助詞の誤用が多くみられる原因について、*Бичигчид*(2016)ではモンゴル語の

* 東京都立大学人文科学研究科・院生

格語尾と日本語の格助詞は一致する場合もあれば、一致しない場合もあるため、誤用率が高くなっていると指摘している。

浅川・竹部（2014）は、日本語の助詞分類の基礎となる助詞相互の承接に関する原則の一つとして、格助詞と格助詞とは重ならないと記述しており、その理由として、格助詞は体言または体言に準ずる語を承けて下の語との関係を表す助詞であるので、格助詞どうしが重なることができないとしている。しかし、モンゴル語では日本語と異なり二つの格語尾が重なって使われる場合がある。例えば、「ᠠᠨᠢ ᠰᠤ ᠠᠨᠢ」というモンゴル語の文の中でモンゴル語の属格語尾「ᠰᠤ」と与位格語尾「ᠠᠨᠢ」を重ねて使用していることが確認できる。この文を日本語に翻訳すると「私の家にある。」となる。モンゴル語を母語とする日本語学習者が、属格語尾が含まれる二重格語尾を日本語の学習過程においてどのように習得・処理しているかに関する研究は、ゴ（2020）のほか見当たらない。

2. モンゴル語の二重格語尾に関する先行研究

清格爾泰（1999）は、モンゴル語の二重格語尾を大きく3分類している。それぞれ、与位格語尾を基本とする二重格語尾、共同格語尾を基本とする二重格語尾、属格語尾を基本とする二重格語尾の3種類である。まず、与位格語尾を基本とする二重格語尾は「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」の1種類のみであり、与位格語尾と奪格語尾が重なっており、モンゴル語の「ᠠᠨᠢ」という名詞に接続して使われるという。次に、共同格語尾を基本とする二重格語尾は次にあげる例のように2つの意味を持つ。例えば「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」（共同格語尾＋奪格語尾）とは「風が吹いているので」という意味があり、「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」（共同格語尾＋与位格語尾）とは「馬がいる人に」或いは「午年の方に」という意味がある。最後に、属格語尾を基本とする二重格語尾については、「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」（属格語尾＋奪格語尾）「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」（属格語尾＋与位格語尾）の2種類を取り上げている。例えば、「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」とは「あなたの家から帰った」という意味を表し、「ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ ᠠᠨᠢ」とは「あなたの家に行った」という意味を表すという。このように、モンゴル語においては2つの各語尾が重なり、どれか一つがなくなると文の意味がわかりづらくなってしまいうという。また、モンゴル語の属格語尾は所有、性質、部分、原材料、容器、時点、場所、設立主体、固有の名称、動作主、範囲を表すと述べている。

フフバートル(1993)はモンゴル語の基礎文法書であり、モンゴル語の二重格語尾についてモンゴル語には格語尾が2つ重なる場合があると述べている。なかでもよく使われるのは属格語尾+与位格語尾および共同格語尾であると述べているが、二重格語尾の細かい分類はされてない。二重格語尾として属格語尾 ᠶᠢᠨ yin、 ᠤᠨ un/ün、 ᠤ u/ü+与位格語尾 ᠳᠤ du/dü、 ᠲᠦ tu/tü および属格語尾 ᠶᠢᠨ yin、 ᠤᠨ un/ün、 ᠤ u/ü+共同格語尾 ᠲᠠᠢ tai/tei[tai,tōi,tei] tai/tei について次のような用例を挙げている。

(1) 先生のところへ行く

これをモンゴルに翻訳すると「 $\text{ᠰᠢᠨᠢᠨᠠᠳᠤ ᠶᠢᠨ ᠲᠤ ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ}$ 」となる。ここでは属格語尾の「 ᠶᠢᠨ 」と与位格語尾の「 ᠲᠤ 」が重ねて使われていることが分かる。

(2) その人のと同じものを買おう。

これをモンゴル語に翻訳すと「 $\text{ᠰᠢᠨᠢᠨᠠᠳᠤ ᠤ ᠲᠤ ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠲᠤ ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ}$ 」となる。この文では属格語尾「 ᠤ 」と共同格語尾「 ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ 」が二重格語尾を形成している。(1)と(2)のモンゴル語の翻訳文のように、モンゴル語では2種類の格語尾を重ねて使うことのできるケースがしばしばみられると述べている。

ゴ(2020)ではモンゴル語の二重格語尾と共同格語尾を基本とする二重格語尾、属格語尾を基本とする二重格語尾、与位格語尾を基本とする二重格語尾に大きく3分類し、属格を基本とする二重格語尾をさらに、「属格語尾+対格語尾(ᠤ ᠲᠤ)」、「属格語尾+与位格(ᠶᠢᠨ ᠲᠤ)」、「属格語尾+与位格(ᠤ ᠲᠤ)」、「属格語尾+奪格(ᠤ ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ)」、「属格語尾+造格語尾(ᠤ ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ)」、「属格語尾+共同格語尾(ᠤ ᠲᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ)」の6種類に分類したうえで、日本語能力試験(JLPT)2級レベルのモンゴル語を母語とする日本語学習者が、属格を基本とするモンゴル語の文をどのように翻訳しているか、正しく表現しているかについて調査した。その結果、「助詞+名詞」「名詞+助詞」「助詞+名詞+名詞」「助詞+助詞」「助詞」「 ϕ 」の6種類で翻訳されていることが確認できた。しかし、この調査ではモンゴル語を母語とする日本語学習者の日本語の能力が上がることによってどのように変化していくのか、また、その特徴が明らかにできていない。

3. 研究目的

以上の先行研究から、モンゴル語を母語とする日本語学習者の格助詞に関する

誤用が多いことや、モンゴル語の格助詞の使い方の複雑性により、モンゴル語の二重格語尾が含まれる文を正しい日本語に翻訳できるのか、できている場合どのように翻訳しているのか、また、正しくできない場合はどのように翻訳しているのか、それぞれの翻訳の特徴を明らかにする。その際、日本語の学習レベルが異なることによって翻訳の形式が異なるのかについて明らかにすることを目的とする。

4. 調査対象者と調査方法

まず、調査対象者については、表1に示しているように、日本語能力試験2級と3級に合格しているモンゴル語を母語とする日本語学習者それぞれ20名とした。調査対象者の40名の調査対象者は全員内モンゴル出身で日本語教育を専攻しており、日本語の学習歴は3年～6年である。なお、N2レベル以上の学習者の内訳はN1合格者5名、N2合格者15名であり、日本語の学習歴は3年～6年であるのに対して、N3レベルの学習者20名の日本語の学習歴は3年である。

表1：調査対象者

	JLPT N2	JLPT N3
人数	20名	20名
出身	内モンゴル	内モンゴル
母語	モンゴル語	モンゴル語
日本語レベル	N1：5名 N2：15名	N3：20名
日本語学習歴	3年～6年	3年
専攻(大学)	日本語教育	日本語教育

本稿で使用する日本語能力試験2級と3級の日本語学習者のデータは、2019年6月7日から2019年6月27日までの21日間にわたり調査したものである。調査文は属格語尾を基本とする6種類の二重格語尾それぞれにつき3つ、計18のモンゴル語の文を使用し、モンゴル語を母語とする2名の大学教員にモンゴル語のチェックを依頼した。そのうえで、それら18の文をランダムに並べ替え、内モンゴル自治区の大学で日本語を専攻とする40名のモンゴル語を母語とする日本語学習者に翻訳してもらった。また、モンゴル語を母語とする日本語学習者の出

身地、母語以外に使用できる言語および、生活言語について回答してもらった。収集したデータの日本語の翻訳文の中から、モンゴル語の二重格語尾の翻訳にあたる部分を取り出し、N2 レベルと N3 レベルの間で比較分析を行った。なお、本稿で使用した日本語能力試験 N2 レベルのデータはゴ(2020)の調査結果である。

5. 調査結果

まず、全体的な結果から述べる。モンゴル語を母語とする日本語学習者が実際に属格語尾を基本とする二重格語尾をどのように翻訳しているかを、以下の表 2 で示す。

表 2 は 6 種類の属格語尾を基本とする二重格語尾の翻訳の結果である。調査文は各種類 18 例であるため、N2 レベル、N3 レベルともに 360 例である。

表 2：属格語尾を基本とした二重格語尾の調査結果

属格語尾を基本とする二重格語尾の種類		属格語尾 +対格語 尾 (ᠦ ᠰᠢ)	属格語尾 +与位格 語尾 (ᠦᠰᠢ ᠦᠨ)	属格語尾 +与位格 語尾 (ᠦ ᠰᠢ)	属格語尾 +奪格語 尾 (ᠦ ᠰᠢᠨ)	属格語尾 +造格語 尾 (ᠦ ᠰᠢᠨ)	属格語尾 +共同格 語尾 (ᠦ ᠰᠢᠨ)	合計
調査文		3文	3文	3文	3文	3文	3文	18文
N2	a	0	0	1	0	0	0	1例
	b	0	2	0	1	0	0	3例
	c	11	48	46	26	44	11	186例
	d	37	5	3	13	10	37	105例
	e	11	4	9	19	6	11	60例
	f	1	1	1	1	0	1	5例
N3	a	0	0	0	0	0	0	0例
	b	0	4	2	2	3	2	13例
	c	17	48	49	20	44	23	201例
	d	27	1	0	17	3	25	73例
	e	16	7	9	21	10	10	73例
	f	0	0	0	0	0	0	0例

a: 助詞+名詞 b: 名詞+助詞 c: 助詞+名詞+助詞 d: 助詞+助詞 e: 助詞 f: φ

(JLPT N2 レベルの結果はゴ(2020)の調査結果である)

調査の結果、N2 レベルの日本語学習者は「助詞+名詞+助詞」の形で翻訳している例が最も多い 186 例、その次に「助詞+助詞」の形で翻訳している例が 105 例、「助詞」の形で翻訳している数が 60 例、「φ」の形が 5 例、「助詞+名詞」の

表6：「属格語尾＋奪格語尾（ θ ኃላ）」の翻訳の特徴の比較

翻訳の形	レベル	属格語尾＋奪格語尾 (用例数)
助詞＋名詞	N2	—
	N3	—
名詞＋助詞	N2	家から(1)
	N3	家から(2)
助詞＋名詞＋助詞	N2	の家から(19)、の服より(5)、の家に(1)、のサイズより(1)
	N3	の家から(14)、の服より(3)、の家に(2)、のサイズから(1)
助詞＋助詞	N2	のから(8)、のより(5)
	N3	のから(8)、のより(9)
助詞	N2	から(12)、より(6)
	N3	から(17)、より(7)
φ	N2	φ(2)
	N3	φ(2)

5.5 「属格語尾＋造格語尾」の組み合わせ

「属格語尾＋造格語尾」の組み合わせの調査文は、次の13) から15) の3つの文である。

13) ልክ ስቲን / ወ / ከ / ገረገረኛ ገደብኝ ።

グロス：「私／スチン／の／に／行って／来た。」

模範的な訳文：私は スチン の 家 に 行って来た。

14) ልክ ሆፎት / ኃላ / ገረገረኛ ገደብ ገደብ ላይ ወ / ከ ግረግረኛ ገደብ ።

グロス：「私／フフホト／から／帰って／来る／時／弟／の／に／寄って／来た。」

模範的な訳文：私はフフホトから帰ってくる時弟の家に寄って来た。

15) ሰላን / ግረግረኛ ገደብ / ስቲን / ወ / ከ ገረገረኛ ገደብ ግረግ ።

グロス：「サラン／先週／スチン／の／に／行って／来た／そうだ。」

模範的な訳文：サランさんは先週スチンさんの家に行ってきたみたい。

調査文13) から15) では属格語尾「 θ 」と造格語尾「 θ 」の組み合わせの二重格語尾が含まれていることが確認できる。属格語尾「 θ 」はこの調査文の中で所属・所有の意味を表しており、つまり、スチンさんまたは弟に所属・所有の意味をあらわしているため格助詞「の」に当たる。造格語尾「 θ 」は通過点の意味を表す場合に格助詞「を」と対応する。手段・道具・方法、まとめり、動作主、材料、

範囲・範囲の限定、原因理由の意味を表す場合は格助詞「で」と、材料、経由点の意味を表す場合は格助詞「から」と対応できる。そのほかに、目的の意味を表す場合は格助詞「に」と対応できる。そのため、調査文 13) の場合は「行く」という動作の目的を表しているので、格助詞「に」に当たる。調査文の造格語尾「^ㄹ」は「寄ってくる」という動作の通過点の意味を表すため、格助詞「を」に当たる。調査文 15) の造格語尾「^ㄹ」は調査文 13) と同様に「行く」という動作の目的を表しているため、格助詞「に」に当たる。次に、学習者の翻訳を表 7 に示す。

表 7 : 「属格語尾 + 造格語尾 (^ㄹ) 」の翻訳の特徴の比較

翻訳の形	レベル	属格語尾 + 造格語尾 (用例数)
助詞 + 名詞	N2	—
	N3	—
名詞 + 助詞	N2	—
	N3	家を(1)、ところに(2)
助詞 + 名詞 + 助詞	N2	の家から(3)、の家に(37)、の家を(4)、のところに(1)、の家へ(1)、を家へ(1)
	N3	の家から(4)、の家に(25)、の家を(8)、のところに(3)、に家に(1)、のところへ(2)、のところを(1)
助詞 + 助詞	N2	ので(2)、のへ(2)、のも(1)、へも(1)、のから(1)
	N3	のに(1)、のを(1)、のから(1)
助詞	N2	から(1)、に(3)、へ(2)
	N3	に(6)、と(1)、を(1)、の(2)
φ	N2	—
	N3	—

表 7 を見ると、まずレベルを問わず見られた翻訳に「の家から」「の家に」「の家を」があり、「助詞 + 助詞」の形で翻訳された実例に「のから」がある。また、「助詞」の形で翻訳されている実例に「に」などがあつた。次に、N3 レベルの学習者の翻訳結果には見られたが、N2 レベルの学習者の翻訳果に見られなかった用例に名詞 + 助詞」の形の「家を」「ところに」の 2 種類、「助詞 + 名詞 + 助詞」の形の「に家に」「のところへ」「のところを」の 3 種類があり、また、「助詞 + 助詞」の形の「のを」「のに」の 2 種類、「助詞」の形の「と」「を」「の」の 3 種類であった。最後に、N3 レベルの学習者の翻訳結果には見られなかったが、N2 レベルの学習見られた形もあつた。実例として「の家へ」「を家へ」「ので」「のへ」

「のも」「へも」「から」「へ」などが挙げられる。

5.6 「属格語尾＋共同格語尾」の組み合わせ

「属格語尾＋共同格語尾」の組み合わせの調査文は、次の16)から18)の3つの文である。

16) wa stchin no to motto kimeta ..

グロス:「私／スチン／の／と／持って／来た。」

模範的な訳文: 私はスチンさんのものとと持ってきた。

17) oto ryougi wa stchin no to ishiro ishiro ..

グロス:「お母さん／料金／を／払う／時／に／スチン／の／と／一緒／支払った。」

模範的な訳文: 母が料金を払う時にスチンの料金と一緒に払った。

18) bato hon wa stchin no to ishiro ishiro ..

グロス:「バト／本／を／返却する／時／スチン／の／と／一緒／返却した／そう
うだ。」

模範的な訳文: バトさんは本を返却する時スチンさんの本と一緒に返却した
そうです。

16) から 18) までの調査文も属格語尾を基本とする日本格語尾が含まれている文であり、「属格語尾＋共同格語尾」の組み合わせの二重格語尾である。この3つの調査文を見ると属格語尾「 no 」はスチンさんの所属・所有の意味を表しているため、格助詞「の」に当たる。次に共同格語尾「 to 」が日本語のどのような格助詞に対応できるかについて意味用法を基に見ると、共同動作の相手、動作の対象、対立的な対象、異同的な対象等の意味を表す場合に格助詞「と」と対応できる。そのため、調査文16)から18)の中の共同格語尾「 to 」は「持って来る」「支払う」「返却」などの動作の対象をあらわしているため、格助詞「と」に当たる。次に、学習者の翻訳の結果を表8で示す。

表 8 : 「属格語尾 + 共同格語尾 (ϕ 形式) 」 の翻訳の特徴の比較

翻訳の形	レベル	属格語尾 + 共同格語尾 (用例数)
助詞 + 名詞	N2	—
	N3	—
名詞 + 助詞	N2	—
	N3	ものも (1)、ものを (1)
助詞 + 名詞 + 助詞	N2	の分と (2)、の本と (2)、の本も (1)、の分も (2)、の本を (1)、を共に (1)、と一緒に (3)
	N3	の本と (1)、の金と (1)、の本も (4)、の本を (1)、のものを (1)、を共に (1)、と一緒に (1)、と一緒に (1)、と一緒に (7)、も一緒に (6)
助詞 + 助詞	N2	のも (18)、のと (17)、との (1)、のまで (1)
	N3	のと (11)、との (7)、のも (6)、のを (1)
助詞	N2	から (1)、と (7)、に (1)、の (1)、も (1)、
	N3	から (1)、と (5)、も (1)、まで (3)
ϕ	N2	—
	N3	—

表 8 を見ると、学習者の翻訳にはばらつきがあり、N2 と N3 で一致している翻訳もあれば異なっている翻訳も見られた。まず、「助詞 + 名詞 + 助詞」の中で学習者のレベルを問わず見られる翻訳の実例に「の本と」「の本も」「のほんを」があり、「助詞 + 助詞」の形で翻訳された実例には「のも」「のと」「との」があった。また、「助詞」の形で翻訳されている実例として「から」「と」「も」などがあった。次に、N3 レベルの学習者の翻訳結果には見られたが、N2 レベルの学習者の翻訳結果にみられなかった用例は「名詞 + 助詞」の形の「ものも」「ものを」の 2 種類、「助詞 + 名詞 + 助詞」の形の「のものを」、また、「助詞 + 助詞」の形の「のを」、「助詞」の形の「まで」であった。最後に、N3 レベルの学習者の翻訳結果には見られなかったが、N2 レベルの学習者には見られた用例として、「の分と」「の分も」「のまで」「に」「の」などが挙げられる。

6. 考察

6 種類の属格語尾を基本とする二重格語尾を、N2 レベルと N3 レベルの日本語学習者がそれぞれどのように翻訳しているのかを図 1 から図 6 で示す。なお、a は助詞 + 名詞、b は名詞 + 助詞、c は助詞 + 名詞 + 助詞、d は助詞 + 助詞、e は助詞、f は ϕ を表す。

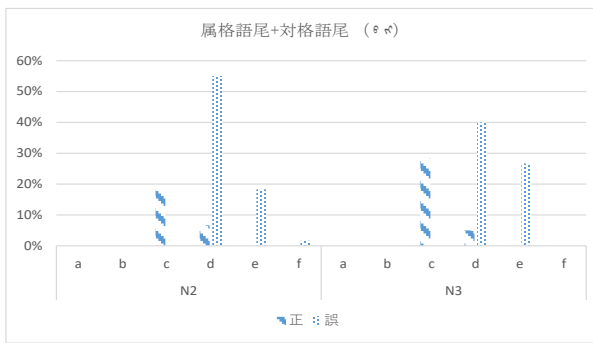


図1 属格語尾+対格語尾

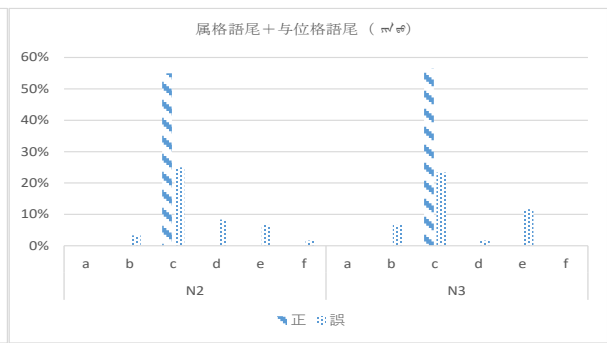


図2 属格語尾+与位格語尾 a

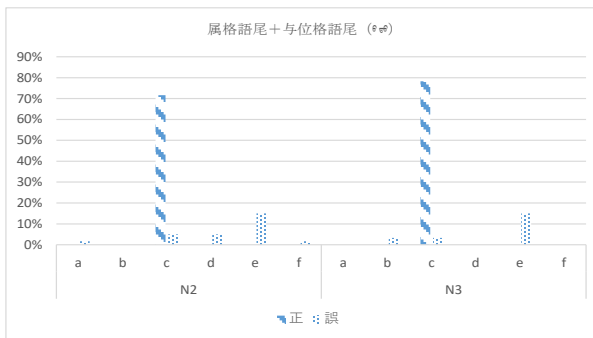


図3 属格語尾+与位格語尾 b

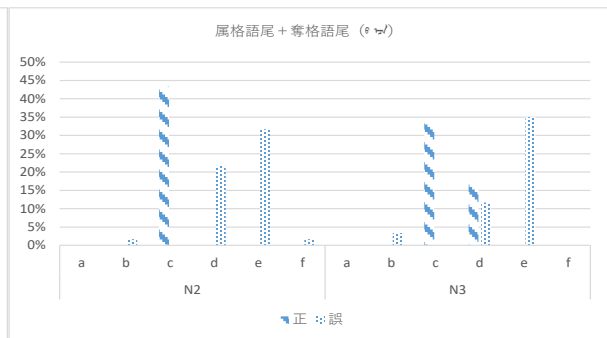


図4 属格語尾+奪格語尾

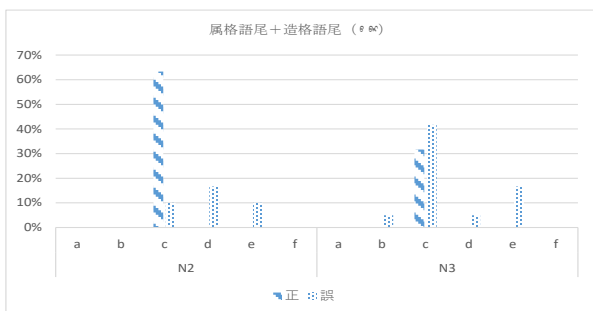


図5 属格語尾+造格語尾

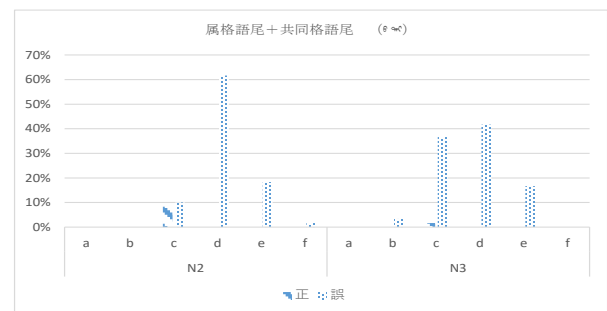


図6 属格語尾+共同格語尾

6.1 正訳について

図1～図6から分かるように、6種類の二重格語尾の翻訳の形が多くある中で正訳は主に「助詞+名詞+助詞」の形で翻訳されていることが確認できる。また、図1の「属格語尾+対格語尾」は「助詞+名詞+助詞」だけでなく「格助詞+格助詞」の形で翻訳され、図4のN3レベルの学習者も「格助詞+格助詞」の形で翻訳していることが確認できる。そのほかにも、6つの図の中で正訳率が最も低く、10%にも達していない二重格語尾は図6の「属格語尾+共同格語尾」の組み合わせであることが確認できる。これらのことから、「属格語尾+共同格語尾」の組み

助詞として分類される場合があると述べている。しかし、体言の資格を有する「の」「から」は、格助詞「へ」「が」などと重ねて用いることができるので、「格助詞と格助詞とは重ならない」という原則に反するしたがって、体言の資格を有する「の」「から」は準体助詞として扱うべきであると指摘している。

7. まとめ

本稿では、中国の内モンゴル自治区における N2 レベルと N3 レベルのモンゴル語を母語とする日本語学習者それぞれ 20 名を二つのグループに分け、属格を基本とする二重格語尾が含まれるモンゴル語の文をどのように翻訳しているかについて分析してきた。

その結果、全体的にみるとゴ (2020) の結果と同様に学習レベルを問わず、「助詞＋名詞」「名詞＋助詞」「助詞＋名詞＋助詞」「助詞＋助詞」「助詞」「φ」の 6 種類の形式で翻訳されていることが明らかになった。その中で、「属格語尾＋共同格語尾」以外の二重格語尾は「助詞＋名詞＋助詞」の形で翻訳され、正確率が高かった。しかしながら、「助詞＋名詞＋助詞」の形であっても間違っている翻訳も少なくなかったという点が特筆すべき結果であった。また、その原因としては名詞に前接する助詞もしくは後接する助詞のどれかが間違っているということが明らかになった。正訳の結果に対して、誤訳のばらつきが多かった。本調査から、学習レベルによる翻訳上の特徴は見られなかった。

参考文献（ローマ字順）

浅川哲也・竹部歩美、2014、“歴史的変化から理解する現代日本語文法”、おうふう。

エルデネビレグ ウヤンガ、2009、“日本語とモンゴル語の格関係の対照”信州大学国語教育学会、19巻、1-11頁。

ゴスチンゴワ、2020、“二重格語尾が含まれるモンゴル語の日本語訳にみられる特徴”、日本語研究、第40号、97-110頁。

フフバートル、1993、モンゴル語基礎文法、インターブックス。

フフバートル、1997、続モンゴル語基礎文法、インターブックス。

小林幸江、1981、“モンゴル人に対する日本語教育の研究－モンゴル人学生の誤用

